

三鷹中央学園



様式6	平成29年度 三鷹中央学園の評価・検証 結果報告	
検証項目	(1) 人間力・社会力の育成	
	○他者との適切な関係を構築する力の育成 ○他者と共に自己実現を図っていく力の育成 ○地域や社会等へ貢献する力の育成 ○その他	
目標	①9年間の防災教育、キャリア・アントレプレナーシップ教育を充実させ、地域や社会と共に生きる力を育む。 ②地域の人財を活用した教育活動を推進し、人や地域とのかかわり、知識・技能等をより豊かにする学びを実現する。	
取組	①コミュニティ・スクール委員会及びみたかスクール・コミュニティ・サポートネット等と協働し、「三鷹中央学園防災教育全体計画」を実践的に検証していく。身に付けさせたい資質・能力の系統化、教科横断的視点からの学習内容の整理を通して「9年間でステップアップする防災教育」を実現する。その際、三鷹中央学園版副読本「カンガエル地域防災」を活用するとともに、地域防災活動への参加を推進する。 ②コミュニティ・スクール委員会等と連携し、地域の人財を活用した教育活動の機会を充実させ、計画的に実施しながら、家庭・地域と共につくる「深い学び」を実現する。	
	成果	課題と改善方策
	①保護者アンケートの肯定的回答は約9割で昨年度より微増であった。「三鷹中央学園防災教育全体計画」を踏まえ、防災課や安全安心課、三鷹警察署、みたかSCサポートネット等と協働し、全学年で防災授業を実施した。協働的な実践の過程で、熟議を取り入れた授業の拡充、防災マップの作成等の新たな取組につながった。9年間でステップアップする防災教育の成果は、地区総合防災訓練における四中生を中心とした活動に表れた。また、その学習過程を外部評価を取り入れたPDCAサイクルとなるよう工夫し、地域・社会と共にアントレプレナーシップを育む取組になった。 ②これも保護者の肯定的回答が約9割で昨年度より微増である。地域人財活用により、児童・生徒の課題意識や情報活用能力に向上が見られ、深い学びにつながっている。	①今年度の実績、3校の教科等の指導計画を踏まえ、来年度の学園研究会「総合」委員会を中心に、全体計画を改善する。 ②今年度の学園研究の成果を生かし、教科等横断的な視点で地域人財の有効な活用を見直し、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。

検証項目	(2) 学校運営について	
	○小・中一貫教育校の学園組織の活性化 ○小・中一貫教育校の教員間、学校間の交流の円滑化 ○小・中一貫教育校の校務、会議の効率化 ○その他	
目標	①学園運営を組織的にいき、円滑化・効率化・活性化を図りながら、教職員間で学び合う。 ②学園・学校評価の内容を改善し、成果や課題を一層明確化するとともに、保護者や地域への啓発を図る。"	
取組	①学園の教育目標の実現に向けて、学園校長会・管理職会の下、3校の全教員が協働して6委員会（教務、生活指導、交流、研究推進、総合的な学習の時間、情報）を運営し、3校の特性を生かした取組を推進する。三鷹市教育研究協力校として、3校が共通の視点をもって授業改善を推進する。 ②学園の取組についての「見える化」「魅せる化」を推進し、ホームページや学校・学年だよりの活用を図る。そのうえで保護者や児童・生徒の声を反映し改善しやすくなるよう学園・学校評価を実施し、成果や改善策等を積極的に周知する。	
	成果	課題と改善方策
	①学園研究会を13回実施するとともに、6委員会の担当ごとに3校共有のデータフォルダを有効に活用して連絡を密にした。教育計画と評価、生活指導上の課題共有、学園生の交流活動、防災教育の計画的な推進、情報発信において、確実に実践することができた。特に学園研究発表会に向けて研究運営委員会を組織し、3校で同じ目標をもち続け、計画に沿った研究実践を行うことができた。 ②学園だよりのほか、学校だよりででも学園3校の情報を掲載し、意図的に啓発を図った。さらに、学年だよりででも、学園の取組を可能な限り児童・生徒の姿を通して伝えた。ホームページの更新を行うとともに、学園間のリンクなどの工夫をした。学園の取組の情報発信について、保護者アンケートでは約8割の肯定的回答を得ている。	①研究発表を通して得た成果を児童・生徒の学習意欲や学力向上に活用するよう、来年度も継続して実践・検討を行う。また、6委員会の時間を確保し、小・中一貫教育校としての取組内容の見直しを図る。 ②保護者アンケートでは、3校の教員の連携した指導について「わからない」という回答が約4割であった。各種おたよりやホームページはもちろん、学校公開等により、学園研究の成果を具体的な学園生の姿を通じて伝える。

		(3) 小・中一貫教育校としての教育活動	
検証項目		○小・中学校間相互乗り入れ授業 ○小学校相互、小・中学校間の児童・生徒の交流活動 ○小・中学校教員の合同授業研究等の学園研究会 ○キャリア教育及びそれに基づく小・中の系統性と連続性を明確にした授業実践、授業改善の状況 ○その他	
目標		9年後の義務教育修了を見据えた「15歳の姿に責任をもつ」教育活動を推進する。そのために ①学園研究会を核として、思考力や表現力等を育む指導を工夫する。 ②交流活動の充実を図る。	
取組		①「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」を学園研究のキーワードとし、年間20本の研究授業・公開授業、教科等の特性を踏まえた指導方法の工夫の資料化に取り組みながら、「考える授業、伝え合う授業」を実現する。 ②児童・生徒交流を豊かに展開し、学園生が共に学び合う意識や学園への帰属意識を向上させる。また、保護者・地域と共に学園間の連携を図った活動を実施する。	
		成果	課題と改善方策
		①学園研究における研究授業・公開授業は年間21本実施した。豊富な実践を踏まえた研究により、教員アンケートにおいて、3校とも肯定的回答が95%となる項目が3項目あった。また、児童・生徒と教員が共通して肯定的回答が高い項目が6項目にのぼった。これは、3校の教員が共通の課題意識をもち、共通の取組を推進してきた成果であると考えられる。 ②自然教室における三小・七小の共通プログラムや合同班編成をはじめ、全学年での小・小交流の実践は定着してきた。小・中についても、中学1年生の90%以上が学園交流に関するアンケート項目で肯定的に回答している。	①学園研究において、思考を深める手だてが明確になりつつあるところであった。目的に応じた対話の場面の設定、思考の視覚化等をキーワードに、学園共通の授業改善を継続する。 ②学園交流活動に関して、児童・生徒に比べて、保護者アンケートでの肯定的回答が少ない。また、保護者は「わからない」との回答が1割以上である。児童・生徒を通じて保護者の理解を得られるよう啓発し、理解と協力を得られるようにする。

		(4) 児童・生徒の学力・健全育成	
検証項目		○ 児童・生徒の学習意欲 ○ 各学年での児童・生徒の学習内容の定着状況（習得、活用、探究） ○ 小学校と中学校の評価の一貫性 ○ 不登校、学校不適應等に関わる児童・生徒の指導・支援	
目標	学力	「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン・すすんで学ぶ人」の取組内容を基に、学校・家庭・地域の実践内容を具体的に展開し、学習習慣の改善を図り、確かな学力を育む。	
	健全	地域・保護者と連携し、各校の「学校いじめ防止基本方針」に基づいた取組を着実に実施して、いじめを防止する。また、学園生活指導重点目標の実現を図る。	
	学力	①「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン」を「三鷹『学び』のスタンダード（学校版及び家庭版）」とともに活用し、児童・生徒の実態を踏まえて項目を計画的に実践する。特に学習習慣の定着に向けて、家庭で取り組むことを学校から発信するよう努め、連携を図る。 ②学力（集中力・読解力・表現力）の育成を図るよう、年間を通した「朝読書」をはじめ、系統的・継続的な読書活動や「学園推進図書」の活用に取り組み、読書習慣につなげる。	
		成果	課題と改善方策
		学力	学力
		①児童・生徒アンケートの「学校の授業がよくわかる」について、小学生の9割以上、中学生の8割以上が肯定的に回答し、昨年度より増加した。また、「苦手だった科目ができるようになった」の肯定的回答も、小・中学校とも昨年度より増加である。学園研究での授業改善の成果であると考えられる。 ②保護者アンケートの読書に関する項目は、他の項目に比べ強く肯定する回答が多い。学園研究での指導及び学校図書館の連携の成果であると考えられる。	①保護者アンケートの「パワーアップアクションプランを活用していること」について、「わからない」の回答が約4割であった。また、家庭学習の指導については、3校とも他の項目に比べて肯定的回答が少ない。習慣化に向けてパワーアップアクションプランの内容を再検討する。また、9年間で段階的に家庭学習に取り組めるよう、学園としての指導計画を学園研究会の6委員会で検討する。 ②「本を読むことが好きだ」という児童・生徒は多いので、児童・生徒自身が生活時間を見直し、読書時間を確保して習慣化を図るよう各校で指導する。
		健全育成	健全育成
		①児童・生徒アンケートの「自分からすすんであいさつをしている」について、肯定的回答が8割以上である。学園生活指導重点目標として取り組んだ成果であると考えられる。 ②児童・生徒アンケートのSNSルールに関する項目では、昨年度よりも肯定的回答が増加している。ルールを決める重要性についての意識が高まっていると考える。コミュニティ・スクール委員会において、いじめ防止のために様々な立場からできることを協議する機会をもつことができた。	①保護者アンケートでは、学園の子供たちのあいさつについて肯定的回答は7割に満たない。児童・生徒に「自分から」に加えて「誰に」「どのように」について目標設定していくよう指導する。 ②三鷹中央学園児童・生徒代表者会議を通して、児童・生徒の主体的な取組を推進する。いじめの有無だけでなく、未然防止や早期発見対応の重要性を保護者会等を通じて保護者に啓発し、連携してできることを話題にする。

検証項目	(5) コミュニティ・スクールの運営	
	○ コミュニティ・スクール委員会の組織・運営 ○ 学校と保護者、地域住民との連携・交流	○ 保護者、地域住民の学校運営への参画の状況 ○ その他
目標	コミュニティ・スクール委員会の組織を活用し、連携しながら、学校、保護者、地域が一体となった取組を推進し、協議と支援の充実を図り、目指す学園生像の実現に努める。	
取組	①役員会（正副会長と3校長）が中心となって、組織を円滑に運営することができるよう、役員会を必要に応じて開催する。事務連絡は電子メールを活用し、積極的に情報の共有化を図る。 ②学園とコミュニティ・スクール委員会等との合同研修会を実施し、相互に組織や活動計画について理解と改善を図り、年間を通じて学校・地域・家庭の協働化を推進する。	
	成果	課題と改善方策
	①役員会を15回程度開催し、必要に応じてコーディネーターの助言を受けながら、全体の組織運営を円滑に行うことができた。副会長を通じて各担当との情報連携ができた。担当制の定着、委員会での協議の充実により、各委員が担当の仕事にとどまらず、活動全体への意識をもって取り組むことができた。 ②合同研修会に、みたかSCサポートネットや学習ボランティア事務局の参加を継続し、その後も連携する意識をもつことができた。コミュニティ・スクール委員会で、新学習指導要領について研修会を企画し実施するなど、委員の学校教育への意識の高さと理解の深さが協働を支えていると考える。	①来年度で任期満了となる委員が多数いることを踏まえ、委員会の協議や担当の活動を通して次につながる活動となるよう、役員会で協議する時間を設定する。 ②各委員が、所属する組織と委員会や学校とをつなぐ啓発を行い、各組織において、学校教育活動やコミュニティ・スクール委員会の活動に協力できることを見直す機会をつくる。

平成29年度 三鷹中央学園の評価・検証結果のまとめ	
(1) から (5) の検証結果を踏 まえて	1 「小・中一貫教育」及び「コミュニティ・スクール」の取組において特によい成果が得られたこと ①学園研究発表会の開催を中心に、3校が一体的に研究活動に取り組むことができた。思考を深めるための手だての工夫を通じて、3校共に教員の意識向上や日常の授業改善が見られたこと。 ②地域人材活用等、地域と共に授業の充実を図り、基礎的・基本的な学習内容の定着、主体的・対話的で深い学びの実現につながり、学習効果を上げたこと。 ③委員のニーズに応じた研修の企画と実施、委員が意見を有効に出し合える協議の設定や会議の仕組みづくりにより、充実した協議を行うことができたこと。
	2 今年度に明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること ①「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン」の再検討をしながら有効な活用を促進する。共通の目標をもって学校・家庭・子ども・地域がそれぞれに行動につなげ、教育目標につながる児童・生徒の資質・能力の育成を図る。 ②学園研究の成果を継続的に実践に生かし、小・中学校一貫して、児童・生徒に自ら考え、表現する力を育むよう授業改善を継続する。 ③児童・生徒の自己肯定感や自己有用感を育む取組を継続する。家庭の理解・協力を得られるよう周知を徹底する。
	3 「2」の重点課題を解決するための改善策 ①新学習指導要領の趣旨を踏まえ、パワーアップアクションプランの「めざす学園生像」も改めて検討する。 ②学園研究発表会の資料等を活用し、授業を通して、小・中一貫した系統的な学習技能や能力を伸ばすよう研究を継続する。 ③児童・生徒の主体的な取組を発達段階や実態に応じて実施し、コミュニティ・スクール委員会や保護者会等で話題にする。